魔法少女リリカルなのは　ANOTHER　AGITO　STORY A's

矢部野　和麻呂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　ＡＮＯＴＨＥＲ　ＡＧＩＴＯ　ＳＴＯＲＹ　Ａ'ｓ

【Ｎコード】
Ｎ９６５５Ｐ

【作者名】
矢部野　和麻呂

【あらすじ】
ジュエルシードを巡る戦いから数ヶ月
木野とフェイト達は、前よりは平穏な日々を迎えていた
だがそのまだ平穏な日々は、すぐに崩れ去った
この小説は『魔法少女リリカルなのは　ＡＮＯＴＨＥＲ　ＡＧ

ＩＴＯ　ＳＴＯＲＹ『の

続きです

これを先に見てもいいですが、作者はそちらを先に見てから

こちらを見て欲しいです

一話（前書き）

もうすぐ冬休みが終わる・・・・

明日から部活・・・・

前作よりも更新速度が落ちそうです

一話

あれから数ヶ月がたった

アースラでは結構平和な日々だった

木野やフェイトの裁判も、もう次で終わる

だが木野とリンディにちょっとした問題がある、それは・・・

「エイミイ君、コーヒーをお願いします」

「あ、私にもお願い」

いつものように二人はコーヒーを頼んだ

でもここからが問題だ

リンディ甘いものが好きだ

でもリンディは少し、いやかなり異常なのだ

コーヒーが運ばれてきた

リンディは角砂糖四個にミルクを入れた

それにたいし木野は無糖のまま、つまりブラックだ

「木野さんは砂糖を入れないのですか？」

「リンディさんこそ砂糖を入れすぎじゃないですか？
それではコーヒーの本来の味が無くなります」
「木野さんこそ、苦いままだと頭の回転がそんなに働きませんよ
砂糖やミルクを入れてみてはどうです？」
「ですがリンディさんは入れすぎですよ
太ってもしりませんよ」
「大きなお世話です」
その光景に見ていたクロノとユーノは溜息をした
「「ハァ」」
「どうしたの？」
フェイトが二人に聞く
「いや、なんでもない、木野さん、少しいいですか？」
「あ、わかりました」
「フェイトとアルフ、その席に座って」
「はい」

「へいへい」

上からフェイトとアルフが返事をする

「さて、最終確認だ

被告席のフェイトは、裁判長の問いにその内容通りに答える事

今回はアルフと木野さんも被告席に入ってもらうから」

「わかった」

「わかりました

と、アルフと木野は返事をした

「で、僕とフェレットもどきは証人席、質問の回答はそこにある通り」

「うん、わかった・・・、っておい！！」

ユーノがテーブルに両手の拳を叩きつける

「何だ？」

「誰がフェレットもどきだ、誰が！！」

「君だが・・・何か？」

と、クロノは普通に返す

「・・・プッ、ククッ」

アルフは笑いを堪える、フェレットもどきはそれに気付かない

「フェレットもどき言うなナレーター！

そりゃ動物形態でいる事も多いけど、僕にはユーノ・スクライアっていう立派な名前が！」

その怒鳴りを聞いた木野がユーノに言う

「ユーノ君、少し落ち着いたらどうです？

実際フェレットの形態でいた事に間違いは無いでしょう？」

「グッ」

「クロノ君もユーノ君をからかうのはやめた方がいいですよ」

「大丈夫です、場を和ませる軽いジョークですから」

「グゥー！」

クロノの言葉にユーノは歯軋りする

「さて、受け答えはしっかり行うようにしてください」

「「「はい」」」

「・・・はい」

最後にユーノが小さな声で行った

木野は海鳴市に来ていた

クロノが裁判を終わらせた後、外出を許してくれたのだ

現在バイクに乗っている

（さて外出できたのはいいがどうするか・・・、なのは君にでも会いに行くか・・・）

因みに今は結構暗い時間帯だ

しかし木野は何か妙な気配を感じ、バイクを止めた

（この感じは・・・）

木野は空を見上げた、そして気付いた

（結界・・・、誰が？）

と思っていたがいきなり爆発音が聞こえた

（・・・、行くしかないようですね・・・）

木野は頭の中で敬語になり爆心地へ向かった

一話（後書き）

木野さんにデバイスを渡そうと思います

そこでアンケート

武器は何がいいですか？

1．如意棒

2．槍

3。剣

4．その他（これを選ぶ人は何が良いか感想に書いてください）

という風です

次

名前を募集します

作者的に闇、や、暗黒を模った物にしてくれるとありがたいです

第二話（前書き）

遅くなっちまった・・・

すみません

地震、凄かったですね

自分は茨城に住んでいて震度６強でした

パソコンは机の上に置いてあって落ちずに何とか無事でした

あー、仮面ライダーの最新映画がぁあー・・・まぁ良いこともありましたけどね

詳しい事は活動報告を見てください

・・・予定通り４月１日に放送できるのかな・・・？

木野さんとシグナム達の戦いを期待していたみなさん

すいません、まだ先になりそうです

第二話

木野は爆心地に行く途中とてつもなく大きな魔砲が結界に向けて発射された

（あれは・・・スターライトブレイカー！？）

その魔砲はなのはの必殺技『スターライトブレイカー』だった

（嫌な予感がする・・・、急がなくては！）

木野はそう思いバイクを加速させる

木野がそこで見たものはボロボロのレイジングハートを持って気絶
しているなのはと
なのはを治療しているフェイト

それを心配そうに見ているアルフとユーノがいた

木野はみんなの所に走って行った

「どうしたんですか！？」

「木野！」

「「木野さん！」」

アルフは木野の存在にいち早く気付き遅れてユーノとフェイトも気付く

「その、今は非常事態だからアースラで」

「分かりました」

ユーノがそういうと木野は了承した

しばらくすると時空管理局の救護班が現れ、アースラに転移した

ー時空管理局本局ー

木野は、アースラに着いた後、何があったかを話され、本局に移動した

そしてなのはは、そこで治療を受けた

木野はユーノとアルフと一緒になのはとフェイトのボロボロになった
デバイスを見ていた
すると扉が開きフェイトとなのはとクロノが入ってくる
「なのは君・・・」
「ユーノ君、アルフさん、木野さん！」
3人の姿を確認したなのはは、嬉しそうな顔になった
フェイトはデバイスの所へ行く
なのはも一緒に行く
ユーノと何やら話してたがクロノが話しかける
「フェイト、面接の時間だ、なのはも一緒に来てくれ」
フェイトとなのはは、頷きついて行く
「・・・」
木野は3人を横目で見送った

木野とアルフとユーノは自動販売機の近くで飲み物を買って休んでいた

因みにアルフは『コカ・コーラゼロ』

ユーノは『ペプシネックス』

木野はもちろん『ＢＯＳＳ』缶コーヒーだった

プシュッっとアルフが缶を開ける

すると茶髪の局員『エイミィ』が歩いてきた

「ユーノ君、アルフ、木野さん」

「エイミィ君」

「レイジングハートとバルディッシュの部品、さっき注文してきたから

今日明日中にはそろえてくれるって」

「ありがとうございます」

ユーノがお礼を言う

「あと、今回の件がさっき正式のウチが担当になったの」

「えぇ?、でもアースラは整備中じゃ・・・」

「そうなんだよねぇ、あ!、そうだ、クロノ君知らない?」

「なのは君とフェイト君と一緒に面接に行きましたよ」

「なんでも、管理局の偉い人みたいだけど」

「へぇー、その人って誰?」

「確か、ギル・なんとかって」

「ギル・グレアムですよアルフ君」

アルフの間違いを木野が訂正する

「あぁ、あの人ですか」

「知り合いなんですか?」

ユーノが質問する

「うん、っとレイジングハートとバルディッシュの整備を一回しよう

その人に関してはその時に」

ー修理室ー

「その人はね、なのはちゃんと同じ世界の出身でね、歴戦の勇士」

エイミィがレイジングハートとバルディッシュの整備をしながら言う

「それでね、クロノ君の指導教官だった人なんだ

一番出世してた時で団体指揮官、後に執務官長だったんだ」

「めちゃくちゃ偉い人じゃん！」

アルフが驚く

「うん、でも良い人だよ、優しいし」

「あ、木野さんにエイミィさん」

「なのはちゃん」

「なのは君」

バッタリと3人は会う

チーンという音と共にエレベーターの扉が開く

3人はエレバーターに乗る

「・・・」

入ると木野はサングラスを掛け黙る

「実はね、なのはちゃん」

「え？」

「リンディ艦長がフェイトちゃんにある話を持ちかけるの」

「ある話？」

「リンディ艦長の養子にならないかって」

そのエイミィの言葉に木野の眉毛がピクッと反応した

「プレシア事件でフェイトちゃん天涯孤独になっちゃったし

艦長の方からウチの子になったらって、フェイトちゃんにはプレシ

アの事とか
いろいろあるし」
木野の脳内であの時の思いが蘇る
プレシアを助けられなかった後悔の念が・・・
しかし木野はハッとなってその事を振り払う
「今は気持ちの整理が着くのを待ってる状態だね」
「そうですか・・・」
「木野さんとなのはちゃん的にはどう思う？」
「私的には良いことだと思います
フェイト君はリンディ艦長みたいな母親が良いと思いますし」
「私も木野さんの考えに賛成です」
「そうですか」
「でも、そうなるとクロノ君、お兄さんですね」
「そうだね、でも結構気が合うらしいし案外良い感じの兄弟かも」
「・・・」

しかし木野は少しその事に反感を持っていた

プレシア事件の時、クロノはフェイトに攻撃を仕掛けた

その事に木野は少し根に持っていた

木野や他のアースラの管理局員、なのはやフェイトはリンディに呼ばれ

さっきの休憩していた所に集められた

するとリンディが歩いてきた

「さて、私達アースラスタッフは今回、ロストロギア闇の書の捜索及び、魔導師襲撃事件の捜査を担当する事になりました
ただ、肝心のアースラがしばらく使えない都合上
事件発生地の近隣に臨時作戦本部を置く事になります
分割は、観測スタッフのアレックスとランディ」
「「はい！」」
言われた瞬間二人の男が返事する
金色に近い髪の色をした男と青に近い髪の色をした男
どちらかがランディでどちらかがアレックスだろう
「ギャレットをリーダーとした捜査スタッフ一同」
「「「「「「はい！」」」」」」
「司令部は、私とクロノ執務官、エイミィ執務官補佐、フェイトさんと木野さん
以上三組に分かれて行動します
因みに司令部は、なのはさんの保護も兼ねて」
リンディが笑って言った

「なのはさんの家の近所になりまーす」

「え？」

なのはがフェイトと顔を合わせ

「わぁー！」

と、とても嬉しそうな声をする

司令部、そこはある大きなマンションの一部の部屋だった

エイミィは私服に着替え、居間を木野と一緒に歩いていた

そこにはフェレットの姿をしたユーノと

子犬の様な姿をしたアルフがいた

「ユーノ君とアルフはこっちではその姿か」

「新形態子犬フォーム！」

アルフがかっこよく言うが

木野はこう思っていた

（そんな姿になれるんならその姿でドッグフード食べてくださいよ！！！！！）

怒りを込めてアルフに念話をする

（ご、ごめんよ）

ビクビクしながらアルフが念話で言う

木野はその場を離れ、リンディと会う

「木野さん」

「リンディ艦長」

「おーいなのは、友達だよー！」

クロノの声が響きなのはとフェイトが玄関に向かう

木野とリンディも歩いて向かう

そこには金髪の前作『魔法少女リリカルなのは　ＡＮＯＴＨＥＲ

ＡＧＩＴＯ　ＳＴＯＲＹ　』で
傷ついた木野とアルフを看病してくれたアリサと
そのお友達、月村　すずかがいた
「フェイトさん、お友達？」
リンディがそう言う
「「こんにち、あっ！」」
二人は木野の姿を確認すると驚きの声を上げる
「お久しぶりですね」
「木野さん」
すずかが木野の名前を言う
「あ、もしかして二人はフェイトちゃんの両親ですか？」
そのすずかの投げかけた言葉に木野とリンディは相手のいる方向から目そらした
「そ、そんなんじゃないですよ、ね、木野さん」
「そそ、そうですよリンディさん」
リンディは頬を赤らめ、木野は何処か恥ずかしそうだった

「わ、私、なのはさんのご両親にご挨拶に行きます、ちょっと待っててね」

「わ、私も用があるのでこれで」

二人は奥に行く

「ハハーン、さては両想いだな」

アリサは誰にも聞こえないようにそう言った

第二話（後書き）

フフフ、さてこれは伏線ですよ

第三話

ー次の日ー

フェイトは、リンディの手配でなのはとアリサとすずかと同じ学校に入る事になった

因みに木野は、リンディの手配で海鳴大学病院に就職する事になった（一時的に）

なのはは、丘の上で魔法を使えるように練習していた

フェイトはマンションの屋上で鉄の棒で練習していた

木野は目覚めのコーヒーを飲み、外でランニングをしていた

（しばらく何もなかったから体が鈍ったかもしれないから鍛えておかないと）

そう思った木野であった

どうでもいいが起きてリンディと顔を合わせて少し恥ずかしがったのは秘密だ

そしてさっき闇の書の資料を少し見て、病院に行った

ー海鳴大学病院ー

木野は病院に勤務していないある医者の穴埋めにある患者を少しの間担当する事になった

因みに患者の名前は『八神　はやて』であった

（しばらく前から足が動かなくなり状況悪化、今の所命の危険性はかなり高い・・・か）

木野は腕時計を見てそろそろ来る時間だとコーヒーを飲みながらまった

しばらくして車椅子の女の子とピンク色の髪をした女性が入ってきた
木野はその女性を見た瞬間闇の書の資料にいる女性と見た目が同じだった為
驚いたが、表面にはださなかった
しかし入ってくるとピンク色の髪をした女性が木野を見た瞬間
強烈な警戒心を見せた、殺気も付けて
「あれ?、いつものあの人は」
「ああ、しばらく出張することになりまして、臨時で私が担当する事になりました
木野　薫です、よろしくお願いします」
「あ、よろしくおねがいします」
木野が頭を下げてあいさつすると車椅子の少女、多分彼女が八神はやてだろう
その子も頭を下げる
「所でその方は・・・?」
「あぁ、親戚で私の保護者のシグナムといいます」
「・・・分かりました、所でここの所何か足に違和感や障害などは

出ましたか？」

「いえ、ここの所は特に何も」

「そうですか・・・、まぁ副作用も無いようですし

もうしばらくはこの治療法を続けましょうか」

「はい、えっと・・・お任せします」

「お任せ・・・ですか」

「何か？」

「自分の事なんですからもう少しマジメに取り組みましょう」

「い、いやその、私、木野先生の事信じますから」

「・・・まだあまり面識のないですからそんな事はあの先生に言ってください」

「は、はい」

とはやては笑って見せる

出て行こうとするが木野が呼びとめる

「シグナムさん、少し話があります」

「・・・、わかりました」

といい、はやてを廊下に待たせて戻ってきた

「・・・」

相変わらず警戒心と殺気を解かさず

「八神さんの日常生活に何か支障は出ましたか？」

「・・・いえ、足の麻痺以外は健康そのものです」

「そうですか・・・、辛いでしょうが私達も全力を尽くしてます」

「・・・はい」

「今はなるべく、麻痺の侵攻を緩和させる方法で進めてます

これから少しづつ、入院を含めた辛い治療になる可能性があります」

「・・・はい、本人と相談してみます」

そういってシグナムは出て行くが扉の前で立ち止まり振り向く

「一つ聞いてもよろしいだろうか？」

「なんでしょう？」

すると物凄い殺気を放ちながら言った

「私を見た瞬間、一瞬驚いたように見えたがどういう事だろうか」

「・・・、いえ、別に驚いてはいませんよ」

「・・・そうか、ならいい」

そういいシグナムは出ていく

（間違いない、彼女はなのは君を襲った人の一人だ）

木野はコーヒーを飲みながら思った

ー時空管理局本局ー

勤務時間が終わり木野はアルフやフェイト達と一緒になのはの

治療の付き添いで来ていた

因みにシグナムの事は話していない

そしてなのはが医務室から出てくる

「検査結果どうでした？」

「バッチシ！、完治したよ！」

「こっちも完治だって」

フェイトがバルディッシュとレイジングハートを差しだす

バルディッシュとレイジングハートはそれにこたえるようにピカッと光る

しかしユーノから連絡が入る

「みんな！、市街地にあの人達が！」

「「「！」」」

その言葉にアルフ、フェイト、なのはは、反応する

「すぐに行きましょう」

木野は冷静にそういった

あるビルの屋上に木野達は転移された

そこには空でクロノと二人組が戦っていた

木野とアルフ、ユーノはなのはとフェイトから少し遠いビルに転送された

二人組はなのはとフェイトの存在に気付く

そして二人がレイジングハートとバルディッシュを同時に構え叫ぶ

「「セートアーップ！！」」

その言葉と同時に二人は光に包まれ

しばらくすると姿の変わったなのはとフェイトが立っていた

第四話

「すみません、ユーノ君、アルフ君」

「「なんだい（ですか）？」」

「私は違う方向で闇の書について調べますので

ちょっと顔を見られないように遠くでみてますね」

「え、でもどうして？」

「少し訳ありなんです、それでは」

「え、ちょっ、木野！」

アルフが呼びとめるが木野はビルを降り

遠くにいった

「なんだろうね、アルフ？」

「さあねユーノ、別の方向から調べるって言ってたけど」

木野の行動に二人は疑問に思った

＊

ー結界の外ー

木野は結界の外のビルの影に隠れて見ていた

何故顔を見られないようにするのは

接触する際にあまり警戒心を持たせるのは得策ではないと判断した

ためである

そこで離れてみる事にした

因みに二人組はなのはの方に注目していた為、木野の存在には気付

かなかった

（さて、どんな展開になるのか、見てましょうかそれに・・・）

木野は少し遠くのビルの上を見るそこには・・・

（今彼女達と接触すると病院で色々面倒な事になりますから・・・

シグナムさん）

そこには結界に向かってゆくシグナムがいた・・・

＊

ー結界内ー

なのはとフェイトはデバイスを起動させ、姿を変えて
話しかけた
「私達は、貴方達と戦いに来たわけじゃない
・・・まずは話しを聞かせて」
「闇の書の完成を目指している理由を・・・」
フェイトが言い、なのはが続きを言った
しかし赤い服の少女は
「あのさぁ、ベルカのことわざにこいうのがあるんだよ
『和兵の使者なら槍は持たない』」
その意味が分からずフェイトとなのはは、顔を合わせる
「話しあいをしようってのに武器を持ってやってくる奴がいるかバカっていう意味だよ
バーカ！」
「なっ！？」
その意味になのはは、ズデッっとなる

「いきなり有無を言わさず襲いかかってきた子がそれを言う！？」
怒りながらなのはは、反論する
そこにまたとなりの男　（犬の耳が付いている事から人間ではない）
が言う
「それにそれはことわざではなく、小話のオチだ」
「うっせぇ！、いいんだよ細かい事は」
すると空からピンク色の落雷が落ちてきた
「「「「！」」」」」
それに４人は反応した
煙が晴れ、そこにいたのは・・・
「！、シグナム」
シグナムだった
シグナムは立ち上がり、フェイトを見る
「ユーノ君！、クロノ君！、手出さないでね
あの子と私、一対一だから！」
「マジか・・・」

「マジだよ・・・」

何故だろう、これが漫才に見えたのはぼくだけじゃないはずアベシッ！

「口を挟むなナレーター、否作者」

すみません、木野さん

因みにさっきのはクロノとユーノの会話です

（アルフ・・・）

フェイトが念話でアルフに話しかける

（私も・・・、彼女と！）

「・・・、あぁ、私もやろうに、ちょいと話しもある」

そう返事し、男をアルフは見る

クロノはユーノを見て念話で話しかけた

（ユーノ、ちょうどいい、今の内に僕達で闇の書の主を探すんだ）

（闇の書の？）

（あいつらは持っていない、・・・おそらく、もう一人の仲間か主が何処かにいる

僕は結界の外を探す、君は結界の中を）

（わかった、外には木野さんがいる筈だよ）

（木野さんが・・・？、どうして）

（分かんない、本人に聞いてみて、あいつらに見られるとまずいとか

他の方向から調べるとか言ってたけど・・・）

（そうか、分かった）

そう言ってクロノは結界の外に向かって飛ぶ

ユーノは、あまりこちらへの流れ弾がこない所で魔法を使って探す

＊

ー結界の外ー

クロノは結界の外で中を見ている木野を見つけた

「木野さん！」

「クロノ君、どうしました？」

「木野さんが結界の外にいるって聞いて

それに結界の外に闇の書の持ち主がいる可能性があるんです」

「・・・、そうですか、分かりました」

「ところで木野さん」

「なんです？」

「別の方向から調べるってどういう事ですか？」

「・・・、少し、ある機会を建ててるんです・・」

「機会？」

「そのうち話しましょう、そのうち・・・」

「え？、木野さん！」

木野は飛び立ってゆく

「どういう事だ？、・・・まぁとにかく今は闇の書の持ち主を探すか」

そう言ってクロノは飛んでゆく

＊

ーあるビルの上ー

クロノは飛んで探している最中、結界を見つめる女性がいた

その手には闇の書があった

それに気付きクロノは、気配を殺し少しずつ近付く

そしてかなり距離が縮みその女性の頭部にデバイスを構える

「捜索指定ロストロギアの所持、使用の疑いで貴方を逮捕します」

それをモニターからリンディとエイミィが見ていた

因みにリンディはマンションから

エィミィは、本局から見ていた

そして木野は少し近めのビルの影に身を隠し見ていた

しかしその直後、仮面を付けた男が現れ、クロノを蹴飛ばした

「グッ！」

その蹴りにクロノはうめき声をあげ、隣のビルの金網に激突する

その仮面の男を木野は難しい顔で見ていた

そして仮面の男と女性が何やら話し女性は意を決した顔で魔法を発動させる

すると空が荒れ、黒い球体の雷が集まる

それを危険と思い、クロノは邪魔しようとするが

仮面の男にまた蹴られる

その後、黒い球体の雷が落ちる

その雷に結界が耐えられず、ヒビが入り

ついには破壊され、そこから3つの光が飛びだし

何処かへ行った

そして破壊された結界の中に、なのはとフェイト、アルフが浮かんでいた

その3人の姿に木野はホッとする

もう一度女性と仮面の男がいた所を見るが、そこには誰もいなかった

木野はそれを黙って見ていた事がバレないようにクロノに走っていった

「クロノ君！」

「木野さん！」

「光があって来たんですけど何があったんですか？」

「・・・、一回戻ってから話します」

「・・・、わかりました」

そういってその場を木野達は後にした

＊

ーマンションー

そこで木野は話しを聞き、なのはとフェイトはカートリッジシステムの説明を受けていた

「・・・、その仮面の男は何者なんでしょうか」

「分かりません、ただ、味方じゃないのは分かります」

「・・・」

木野は壁にもたれて考え込む

そこにリンディが口を挟む

「問題は、彼らの目的よね」

「えぇ、腑に落ちません」

クロノが言い、続ける

「自分の意思で闇の書の完成を目指しているような」

「それっておかしいの？」

アルフが口を挟む

「闇の書のってのも、要はジュエルシードみたくすっごい力が欲しい人が集める物なんでしょ？

だったら、その力が欲しい人の為にあの子達ががんばるのもおかしくないと思うんだけども」

その言葉にリンディとクロノは顔を合わせる

そこに木野が口を挟む

「・・・、第一に闇の書はジュエルシードみたく自由に制御が効くものじゃないんです」

「完成前も完成後も純粋な破壊にしか使えない」

そしてクロノが口を挟み、リンディがその先を言う

「少なくとも、それ以外に使われたという記録は一度もないわ」

「あぁ、そうか」

「・・・、闇の書は主に何か害を及ぼす可能性はありますか？」

「それに関しては分からないわ、まだ闇の書は分からない部分が多いの」

「・・・そうですか」

「それからもう一つ、あの騎士達、闇の書の守護者の性質だ

彼等は人間でも使い魔でもない」

「「「！」」」

エイミィとフェイト、なのはが驚く

「彼等は、闇の書が生み出した疑似人格」

「要は機械のＡＩの様な物です」

クロノがコクリと頷き続ける

「主の命令を受けて行動するただそれだけのプログラムに過ぎない筈なんだ」

「ですが彼等はまるで自分の意思でやってるように見える」

「そう、そこが問題なんだ」

その木野の言葉にクロノが肯定して皆は黙りこむ

第五話（前書き）

凄く・・・短いです・・・

いままで２０００文字は打つと決めていたんですけど

リリなのＡ' ｓ編の６話って

なのは達の視点が少ないんです・・・

今回何時もより速いのはそのお陰ですけど・・・

第五話

「あの・・・」

フェイトが口を挟む

「使い魔でも、人間でもない、疑似生命っていうと

私みたいな・・・」

しかしその言葉の意味を知った木野とリンディは

「「違います！」」

同時に感情的になって言う

「フェイト君は、生まれ方が少し違うだけで、ちゃんと生み出された人間ですよね？」

「検査の結果でも、ちゃんとそう出ていたでしょ？」

「変な事言うものじゃない」

木野、リンディ、クロノと、順番に喋った

「はい、ごめんなさい」

と、フェイトは謝る

するとエイミイが何か閃いたように手を合わせる

「モニターで、説明しませんか？」

そこエイミイの言葉に木野とリンディ、クロノは頷く

すると部屋が暗くなって立体映像が現れる

そこには闇の書とその守護者達の姿が写っていた

そこにクロノが前に出る

「守護者達は、闇の書に内臓されたプログラムが人の形をとって

闇の書は、転生と再生を繰り返してる、この四人はずっと闇の書と

一緒に

様々な主の下を渡り歩いている」

そこにエイミイが解説する

「意思疎通の対話能力は、過去の事件でも確認されてるんだけどねぇ・・・

感情を見せたって例は、今まで一度もないの」

そしてリンディが言う

「闇の書の蒐集と主の防衛、彼等の役目はそれだけですものね」

そこになのはが口を挟む

「でも、あの帽子の子、ヴィータちゃんは怒ったり悲しんだりしてたし」

「シグナムからも、ハッキリ人格を感じました

・・・、成すべきことがあるって、仲間と主の為だって」

「主の為・・・か」

「一つ良いですか？」

「何です？」

「もし、もしもですよ

もし闇の書の新しいプログラムによって感情などが作られた可能性は？」

「確かに、それなら納得できますけど・・・」

「私が最初に攻撃されて、攻撃を仕返した時

ヴィータちゃんの帽子が吹き飛ばされたんですけど

その時、尋常的じゃない程怒りました

まるで・・・、自分の大切なものが傷つけられたみたいな」

「・・・、そうですか・・・」

そのなのはの言葉が言い終わると同時に皆は黙りこむ

そしてモニターは消え、部屋が明るくなる

そしてリンディはクロノに近付く

「まぁ、その辺は捜査している管理局員に任せましょうか」

「転移頻度から主がこの付近にいるのは確実ですし

案外、主が先に見つかるかもしれません」

「あぁー、そりゃ分かりやすくて良いね」

アルフが近付く

「だね、闇の書が完成前なら、持ち主も普通の魔導師だし」

しかし木野は浮かない顔をしている

実は木野は主の目星が付いている

彼の担当患者　八神　はやて、木野は彼女が主だと睨んでいる

一番の理由はシグナムと一緒に来たからである

それにシグナムは、何処か彼女に敬意を出していた

そこで彼女が主だと睨んだのである

「それにしても、闇の書について、もうちょっと詳しいデータが欲しい」

クロノはユーノに近付く

「ユーノ、明日から少し頼みたい事がある」

「？、いいけど」

そういってクロノは笑った

第五話（後書き）

文字数が１１６５字ってね

いつもの半分程度しかないっていう

すみません

次回は多分何時も通りに出来るとおもいます

第六話

ー海鳴大学病院ー

木野は自分の診察室で八神　はやての資料、そして闇の書の資料を見ていた

幸い今日はほとんど来る患者がおらず、静かに見れた

（最初にここで運ばれて来たのはかなり前、そして同僚によると

シグナムさん達が現れたのもこの時期

その頃は足が動かないだけで命の害はあまりなかったが

しばらくしていきなり体に異変が起き、命を失う危険性がかなり高まった

・・・、やはりこれは闇の書が関わっているとしか思えない

そしてシグナムさん達は自分の意思で闇の書の蒐集をしていると見える

・・・蒐集する理由・・・、これが未だ分からない

闇の書を完成させても今の所確認されているのは絶大な破壊する為の力しか得られない

・・・、闇の書を完成させる事によって違う何かが起こる・・・？

確かにそれならある程度納得できるがやはりまだ不可解な点が多い・・・

やはりリンディ提督や皆にこの事を話した方が良いか・・・

嫌、それは駄目だ、もし報告したら管理局がどんな命令が下るか・・・）

じつはこの男、木野　薫は時空管理局をあまり信用してない

アースラの面々は信用出来るが、その命令を下す側、時空管理局はなんとなくだが、信用に値しないと、木野は考えている

（・・・、もうしばらくは様子を見ますか

何より彼等と接触するのはあまり得策ではない

敵対視された場合この部屋に気まずい空気が流れ診察しにくくなる

それだけは勘弁してもらいたいな・・・

それにそうなると私を襲ってくる可能性が出てくる

・・・、これが一番厄介だな・・・

・・・、今日は午前で私の勤務時間が終わりますから一回戻りましょうか・・・）

そう考え腕時計を見る

ＡＭ１０：４７分だった

（そろそろ終わりますね）

木野はそう思いコーヒーを飲む

コーヒーは冷めきっていた

（・・・、これからはなるべく早く飲もう）

＊

ーマンションー

木野は勤務時間が過ぎマンションに戻ったそこで
木野はリンディとフェイトと出会った
「あ、木野さん」
「フェイト君、リンディさん、お出かけで？」
「えぇ、フェイトさんが欲しい物があるって」
「欲しいもの？」
その質問にフェイトが答える
「はい、その・・・、ケータイが欲しくて・・・」
「なるほど、そうですか」
「木野さんも一緒に行きませんか？」
「アハハ、でもそこはお二人で「行きましょう！」」
そのリンディの提案に木野は断ろうとしたがフェイトがその提案に賛成する
「え、ですが・・・」
「構いません、行きましょう！」
フェイトも木野を誘う

「・・・、わかりました、少し待っていてください」

木野は笑い自室に戻る

４，５分位すると私服の木野が出てくる

因みに木野の私服は基本黒一色だった

病院内ではちゃんと白衣を着ていますよ

「行きましょうか」

「「ええ！」」

そういって外に３人は出る

＊

ｌ○０ｋ０ｍｏｌ

木野達三人は○ｏｋｏｍｏでフェイトのケータイを買った

「ありがとうございました」

男性の店員がフェイトが選んだケータイを丁寧袋に包み渡す

「フェイト君、はい」

そして木野は腰を低くしてフェイトに渡す

「ありがとうございます、リンディ提督、木野さん」

フェイトはお辞儀して遠くにいるなのはとアリサとすずかの所にいった

「・・・」

リンディはその光景を笑ってみる

「随分と変わりましたね、フェイト君は」

「えぇ、とても表情が豊かになりました」

木野とリンディはフェイトが今までと比べて変わった事について話す

「最初にあった頃はほとんど無表情が多かったですし」

「やっぱり普通の生活をしているこうなる物なんですね」

「えぇ、本当に・・・」

「「変わりましたねぇ・・・」」

と二人同時に言った

＊

ーマンションー

木野はフェイトとなのはと一緒に食材を買って戻った

そしてフェイトとなのはは、フェイトの自室で雑談をしていた

しばらくして二人は部屋が出てきて

食材を冷蔵庫に入れる手伝いをしてきた

そしてエイミイは食材をフェイトとなのはと木野に渡す

そして最後にフェイトにカボチャを渡し、質問する

「艦長、もう本局に出掛けちゃった？」

「うん、アースラの武装の追加が済んだから

試験航行だって、アレックス達と」

「武装っていうと・・・、アルカンシェルか？

フゥ、あんな物騒な物、最後まで使わずに済めば良いのに・・・」

「クロノ君もいないですし、・・・戻るまでは

エイミイさんが指揮代行だそうですよ」

（責任重大・・・w）

アルフはなのはの言葉に笑いながら思う

「・・・、ハハ、それもまた物騒だ・・・」

カボチャを擦りながら言い、鷲掴みする

「ま、そうそう非常事態なんかに起こるわけが・・・」

（あ、フラグだ）

木野がそう思うと警告音が部屋に鳴り響く

（やっぱり・・・）

木野はどうでもいいことを考えた

そして非常事態が起こった事にエイミイはショックを受けカボチャを落とす

＊

ーエイミイの自室ー

そこにあるモニターにはシグナムと男の姿があった

「カルベル０、人間の住んでいない砂漠の世界だね」

そしてエイミイはキーボードを物凄い早さで打つ

「結界が貼れる局員の到着が最速で４５分

うぅーん、まっずいなぁー」

そしてまたキーボードを打つ

するとフェイトとアルフが顔を合わせ頷く

「エイミイ」

「うん？」

フェイトはエイミイを呼んで振り向かせる

「私が行く」

「私も」

フェイトとアルフそう言う

「・・・、うん、お願い」

エイミイはそう言うとフェイトは自室に戻り

バルディッシュを手に取る

「なのはちゃんはバックス

ここで待機して」

「はぁーい」

なのはは、素直にそういう

「木野さんは・・・」

「私もここに残ります」

「そうね」

そして3人はモニターを見る

そこには怪物の触手に絡まれているシグナムがいたが

その触手はフェイトの攻撃によって切られた

その後、フェイトは魔法の攻撃で怪物にダメージを与える

するとその怪物は力尽き倒れる

そしてもう一つのモニターには男に話しかけるアルフの姿があった

何やら話した後二人は構える

そしてフェイトとシグナムも構え突撃する

しかしまた部屋に警告音が鳴る

「っ！、もう一か所！？」

もうひとつのモニターには闇の書を片手に持つヴィータの姿があった

「本命はこっちのようですね」

「なのはちゃん！」

「はい！」

なのはは、頷く

そしてなのはも転移した

そしてヴィータの前に姿を現す

そして二人もなにやら話すが

ヴィータが魔法の塊を持ちそれを叩いて光を拡散させ、目くらましをする

その光になのはは目を瞑る

その隙を見てヴィータは遠くに言って転移しようとするが

なのははそれを許さず特大のディバインバスターを放つ

それに直撃し、煙が出る

煙が晴れるとそこには

「「なっ！」」

仮面の男の姿があった

しかしなのはは、またディバインバスターを放とうとするが

仮面の男は、なのはにバインドを掛ける

その間にヴィータは転移した
そしてなのははバインドを何とか解くがそこにはもう誰もいなかった
木野はフェイトの所にも現れるかもしれないと考え
少しづつエイミイから離れ
静かに部屋を出る
そして腕を交差させ言う
「変身！」
そして光に包まれるが晴れた所にはもう何もなかった

＊

ー砂漠ー
そこでフェイトとシグナムは本気で戦っていた

両者共に体力が限界に近付いていた
そして二人共次で決めると思い
同時に動くが
フェイトの腹部から腕が飛び出す
「なっ！」
それにシグナムは驚く
そしてフェイトの後ろには仮面の男の姿があった
そして腕が光輝き、フェイトが悲鳴を上げる
「くっ、貴様・・・っ！」
その手の平には、フェイトのリンカーコアがあった
そして仮面の男は言った
「さぁ、奪え・・・」
しかしそこにまた違う異形の者が歩み寄っていた
その存在に仮面の男とシグナムは気付き見る
その姿は赤い大きな目があり

二つの角の様な物が頭にあり

腹部は緑色の割れた腹筋があり

首からオレンジ色のマントの様な物をはおっていた

その姿は、『木野　薫』のもう一つの姿『アナザーアギト』の姿だった

第六話（後書き）

やっと木野さんが変身しました

次回は仮面の男と対決させるつもりです

・・・、まぁネタバレですが逃がすつもりです

そうしないと色々ヤバイですからね

ではまた次回

第七話（前書き）

今回、一方的です

一方的ですから少しアレかもしれません

戦闘だけで１０００文字突破しちゃったよ・・・ま、いっか

後今頃気づく、僕の戦闘描写下手だなぁって

良く読んで考えたりしないと分かりにくいかもしれません

それと前作、魔法少女リリカルなのは　ＡＮＯＴＨＥＲ　ＡＧＩＴＯ　ＳＴＯＲＹ　無印の

２話と１５話を編集して

伏線を全て消去しました

伏線回収が出来ないんですよぉ！

もうしわけございません

本当にもうしわけありません

第七話

砂漠の中、アナザーアギトは仮面の男とシグナムに挟まれるように現れた

仮面の男から見て

（妙な生き物だな、この世界にはいない筈だが）

と考えシグナムは

（何者だコイツ！、いきなり何事もなかったように現れたぞ！）

と、考え、アナザーアギトを警戒した

そしてアナザーアギトは

（変身してきたおかげで正体はばれないだが

エイミイ君が私が部屋にいない事を少しでも遅く気付いてほしいな

・・・、とにかくフェイト君を助けますか・・・、実力行使で）

とアナザーアギトは考え、一瞬で仮面の男の後ろに移動した

アナザーアギトの姿が消えた事にシグナムと仮面の男は少し驚くが

アナザーアギトは仮面の男の腕を掴み、フェイトから無理矢理引き出した

「なっ！？」

後ろにいた事に仮面の男は驚くがアナザーアギトはその顔面を殴り飛ばした

「グハッ！」

そして仮面の男は大きく吹き飛ぶ

「くっ、貴様・・・」

仮面の男はアナザーアギトを敵と判断し、バインドをかける

だが

（この程度・・・、ヌン！）

アナザーアギトは何事もなかったようにバインドを引き千切った

「なっ、そんな」

しかし仮面の男の驚きを無視して少しずつ歩み寄る

（戦うしかないか・・・）

仮面の男はそう考え、アナザーアギトに走ってゆき、蹴りをするが

（フッ！）

体を少しずらし、紙一重で避ける

その行為に仮面の男は驚く、アナザーアギトがその隙を逃すはずがなく

足を掴み、砂漠の地面に叩きつける

その力で砂漠の地面にクレーターが出来る

「グハッ！」

仮面の男はうめき声を上げるが間髪いれずアナザーアギトはその顔面にパンチを入れようとしたが

仮面の男は何とかそのパンチを避け、距離を取る

そしてシグナムは

（アイツ、戦い慣れているそれに・・・奴は私達四人で戦っててもに負けるかもしれん・・・

止むを得ん、ここは引くか）

シグナムはそう考え、この世界から転移した

そしてアナザーアギトは

（転移しましたか、まずは計画通り、さて仮面の男は・・・っと！）

仮面の男はまた蹴りを入れようとするがアナザーアギトは

また紙一重で避けるが
そのまま仮面の男は回し蹴りをする
アナザーアギトはそれを予想したのか、バックステップで避ける
そして仮面の男は走って近寄り、パンチを入れようとするが
アナザーアギトは紙一重で避けて、腹にカウンターを入れる
そのカウンターに仮面の男は呻くがまたパンチを入れようとするが
その瞬間、アナザーアギトが渾身のボディブローを入れる
メシャッという音が響く、バキャッではないメシャッだ
意味は分かるだろうか?、アナザーアギトのそのボディブローは
骨を『折った』のではない、骨を『砕いた』のだ
仮面の男は、大きく吹き飛ばされる
「ガハッ!」
仮面の男は何とか受け身を取るも、腹部の骨が幾らか砕けた事で
仮面の下から、ドバッと血が出る
仮面の男は不利と考え、その世界から転移した

仮面の男が転移したのを見てアナザーアギトも、その場から
歩いて消えていった・・・

＊

ーエイミイの自室ー

エイミイはアナザーアギトの戦いに魅入っていたが
戦いが終わり、我に戻って
辺りを見回す

「あ、あれ！？、木野さん！？」

木野がいない事で混乱するが
フェイトのモニターを見る
そこにはフェイトを抱える木野の姿があった

（な、何だ、フェイトの事助けに行ったのか・・・って無断行ってるし！）

そう考えるが、まあいいかとエイミイは考え直す
そして木野に駆け寄るなのはの姿も確認出来た

＊

ーアースラ内、会議室ー
木野はそのあとすぐに本局の医務室にフェイトを運び
アースラの会議室に呼ばれた
そこには
なんはとクロノ、リンディとアルフ、エイミィとネコ姉妹（木野はまだ名前を聞いていない）
アースラの局員の面々がいた
そしてリンディが言う
「フェイトさんは、リンカーコアに酷いダメージを受けてるけど
命に別状はないそうよ」

リンディは微笑みながら言う

「私の時と同じように闇の書に蒐集されたんですね」

「いえ、それを阻止した者が現れたのよ」

「阻止した者・・・？」

「これを見るんだ」

クロノが立体画面を出す、そこにはアナザーアギトの姿があった

「こ、この人って・・・」

「人、とは言えないかもしれない

フェイトが闇の書に蒐集される前にコイツは現れたらしい

そうだろ、エイミイ？、木野さん？」

クロノがエイミイと木野に聞く

「うん、いつの間にか、転移したような魔力もなかったし」

「はい、一瞬でそこに現れて仮面の男を撃退しました」

「・・・でも敵じゃないんですよね？」

「それを断定するのはまだ早い

ただそこに立ち寄っただけかもしれないし
どんな奴かもまだ分からない」
「・・・」
木野はクロノとなのはのやり取りを黙って聞いていたが口を開く
「でも、アースラが稼働中で良かったですね」
「そうですね、なのはの時以上に、救援が早かったから」
「だね」
ネコ姉妹の片方が頷く
「あの、少し良いですか？」
「なんです？」
木野の質問にリンディが反応する
「そのネコ耳の方達は・・・？」
「あぁ、そういえば木野さんは知りませんでしたね」
「姉の、リーゼ・アリアです」
姿形は同じだが、大人っぽい声の方が姉のようだ

「同じく、妹の、リーゼ・ロッテでーす！」
子供っぽい感じの声の方が妹のようだ
「二人が出動してしばらくして
柱頭所の管制システムが、クラッキングで粗方ダウンしちゃって、
それで
指揮や連絡が取れなくて、ごめんね、私の責任が・・・」
エイミイが俯きながら申し訳なさそうに言う
「んな事ないよ、エイミイがすぐシステムを起動させたから
アースラと連絡が取れたわけだし、仮面の男の映像だって
あの謎の生物だって、ちゃんと残せた」
立体映像にフェイトを抱える仮面の男の映像が浮かび上がった
「でもおかしいわね、向こうの機材は管理局が使っているのと同じ
システムなのに
・・・、それを外部からクラッキング出来る人間なんて・・・いる
ものなのかしら？」
「そうなんですよ！、防壁も、警報も、全部素通りで

いきなりシステムをダウンさせるなんて・・・」
「ちょっと、ありえませんね・・・」
そのエイミイの言葉に木野も言う
「それだけ、凄い技術者がいるって事ですか？」
「もしかしたら、組織立ってやっているのかもね」
なのはの質問にロッテが答える
「君の方から聞いた話だと、情報や関係がよくわからないな」
「あぁ、私が駆け付けた時には、もう仮面の男はいなかった
そこで、木野がフェイトを抱きかかえてて」
「アレックス！、アースラの航行に問題はないわね？」
「ありません」
「では、予定より少し早いですが、これより司令部をアースラに戻します
各員は所定の位置に、っと、なのはさんは家に戻らないとね」
「あ、はい、・・・でも」
「フェイトさんの事なら大丈夫、私達でちゃんと見ておくから」

「う・・・、はい」

と、なのはは笑って返事する

＊

ー次の日、海鳴大学病院、木野の診察室ー

（さて、もうすぐこの診察室ともお別れですか・・・

懐かしい感じだったな・・・、昔の自分の様な感じがして・・・）

「木野先生！、大変です！」

この病院の看護婦が入ってくる

その焦ったような顔に木野は聞く

「なんですか？」

「八神さんが救急車で！」

「！」

その言葉に木野は驚く

＊

ー病室ー

「まぁ、大丈夫みたいですね、良かったです」

木野は少しだけだが、はやての健康状態を見てホッとする

「はい、ありがとうございます」

はやては笑って返事する

「ハァ、ホッとしました

所で貴方は・・・？」

金髪の女性が木野の事を聞く

「少し前から、八神さんを緊急担当することになった

木野　薫です、貴方達は・・・？」

「あ、私はシャマル、そこのちっこいのがヴィータです」

「誰がちっこいだ！」

金髪の女性、シャマルは、はやての傍にいる小学生位の子を指さす

「せやから、ちょっと目眩がして、胸と手がちょっと攣っただけやって言うたやん

もぉ、みんなしておおごとにするんやから・・・」

「あれ・・・？、八神さんって、関西弁だったんですか？」

「そうですけどぉ、何か？」

「い、いえ、なんでもないです」

「でも、頭打ったし」

「何かあったら大変ですから」

シャマルとシグナムが心配そうに言う

「はやて、良かった・・・」

はやてがヴィータの頭を撫でる

「まぁ、来てもらったんですし、検査などもしたいですから
もう少し、ゆっくりして行ってもいいですよ」
「はい」
「さてと、シグナムさんにシャマルさん、少しよろしいでしょうか？」
「はい」
「？」
シグナムは、相変わらず警戒を解かずに、シャマルは、首を傾げ
ついて行く

＊

ー病院内廊下ー
「今回の検査ではなんの反応も出ていませんが
攣っただけ・・・、という事はないとおもいます」

「はい、かなりの痛がりようでしたから」

「・・・、麻痺が広がり始めている可能性があります

・・・、今までこういう様子はなかったんですよね？」

「と、思うんですが、はやてちゃん、痛いのとか辛いのとか隠しちゃいますから」

「・・・、一人で背負い込むタイプですか・・・

発作がまた起きないとは思えません・・・、用心の為にも

少し入院してもらった方が良いですが・・・、大丈夫でしょうか？

一回八神さん本人に聞いてみてさい」

「・・・、はい」

シグナム達は、はやての病室に戻る

「・・・」

木野は手を握りしめる・・・、血が出るほどに・・・

＊

ー時はかなり飛び夕方のはやての病室ー

そこでなのはとフェイトは、すずかと友達だったらしく

はやてと会った

そして病室の廊下にはサングラスを掛け

コートを着こむシャマルが覗き込んでいた

そして木野が偶然通りかかり

「・・・、何をやっているのです？

シャマルさん・・・？」

「あ！、ち、ちょっと気になりまして・・・」

「だったら入ればいい・・・」

ガラッと扉を開け、木野の台詞はとまる

そこにはなのは達の姿があった

ガラッとすぐ閉める

幸い開いたことには気づいていなかった

「・・・、なるほど、八神さんの友達の友達がいて

入りづらいと・・・」

「は、はい」

木野はシャマルが闇の書の守護者という事を知っているが

そのことをなのは達には話していない

「あの・・・、ええっと・・・」

「まぁ食堂に行ってたらどうです？

あの人達が出て行ったら呼びますから」

「はい、ありがとうございます」

そういってシャマルは行くが

「あの、反対ですよ？」

「す、すみません」

テンパっているようだった

しばらくしてなのは達は出ていく

木野は食堂に行った

＊

「シャマルさん、あの人達が行きましたよ」

「あ、ありがとうございます」

そう言って走ってゆくが

「病院内では走っちゃだめですよぉー！」

その警告にシャマルは振り返り礼をし

歩いて行く

（あ、何もない所で転んだ）

それに周りの人達は妙な目で見た

第八話（前書き）

少し遅くなりました

すみません

所でまだアンケートは実施してます

第八話

（そういえば明日はクリスマス・イブでしたね）

そう、この日、今日は１２月　２３日

明日はクリスマス・イブなのだ

（何かみなさんにプレゼントした方がよろしいのでしょうか・・・？

っと、そろそろ勤務時間の終わりですね、一回顔を出しますか）

そう考え、鞄に必要な物をしまい、はやての病室に行く

＊

「こんにちは」

「あ、木野先生、こんにちは」

木野が病室に入り、挨拶するとはやても挨拶する

しかし木野はシグナム達が来ていない事に気付く

「あれ？、今日はまだ来ていないんですか？」

「はい、でも明日は来るって言ってました」

はやてはそう言って笑う

「所で、どうかなさいました？

今日はもう診察とか終わりましたけど・・・、ハッ！

まさか私の事・・・」

そう言って胸を隠す

「何故そういう考えに至るのか不思議です

大人をあまりからかうのは良くないですよ」

「いやですねぇ、冗談に決まってるますよ」

はやては笑いながらそう言う

（嫌、・・・何故か貴方が言うと本気になりかけるんですけど・・・）

「・・・、体の具合はどうですか？」

しばらくジト目になっていたが、はやての状態を聞く

「えぇ、今の所何もありません、大丈夫です」

「・・・、そうですか、所で確かしばらく前からシグナムさん達と住むようになったんですよね？」

「はい、そうですけど」

「やはり、身内と一緒にいるは楽しいですか？」

「えぇ、もちろんです」

「・・・、そうですか、ではそろそろ自分の勤務時間も終わるので」

「あ、はい、さよなら」

そう言って木野は病室を出る

＊

ー次の日木野の診察室ー

（さて、今日はクリスマス・イブか・・・

・・・、雪が降りそうな気配ですね・・・）

木野は天気を気にし、空を見て思う

そして腕時計を見る

（・・・、夕方・・・ですか・・・

一回顔を出しますかな・・・）

そう考え、席を立ち、はやての病室に行く

＊

ーはやての病室前ー

木野は、はやての病室の前に行き

扉を開ける

「調子はど・・・ぅ・・・・」

「「「「木野さん！？」」」」

そこにはなのはとフェイト、すずかとアリサ

そしてシグナムとヴィータ、シャマルの姿があった

「知り合いですか？」

はやてが木野にそう聞く

「え、えぇ、まぁ・・・」

木野は片手で頭を抱える

（そんな・・・、まさか・・・、まさかこんな事態になるとは・・・）

そう考え、傍にある席に座る

そしてなのは達の知り合いと分かったら

シグナムとヴィータ、シャマルは木野を敵視する

「木野さん、もしかしてはやてちゃんの・・・」

「えぇ、私が担当しています」

「そうなんですか」

すずかの質問に答える

そして今、この病室にはとても嫌な空気が流れている

しかしはやてがシャマル以上に殺気立たせた目を見てなのはは、

「あの、そんな睨まないで」

「睨んでねぇです、こういう目付きなんです」

（いや、その日本語・・・、多分間違っていますよ）

その会話を聞いて木野は考え、はやては

「ヴィータ、嘘ばっか悪い子はこうやで！」

はやてはヴィータの鼻を摘まんで人差し指を立てながら引っ張る

（・・・、この不穏な空気・・・

何とかできないものか・・・）

＊

ー夜海鳴大学病院屋上ー

しばらくはやてはすずか達と話し合って

時間が立ち、夜になり、すずか達は帰って行ったが

なのはとフェイトは残り、シグナムとヴィータ、シャマルと屋上にいた

木野もそこにいた

「はやてちゃんが・・・、闇の書の主・・・」

「悲願は後僅かでかなう」

「邪魔をするなら、はやてちゃんのお友達でも・・・！」

「まって！、ちょっとまって！、話を聞いてください！

駄目なんです！、闇の書が完成したら、はやてちゃんは！」

しかし上空からヴィータが攻撃を仕掛ける

その攻撃をなのはは、防ぐが吹き飛ばされる

「なのは！」

「ウォオオオ！！」

シグナムが咆哮を上げ、フェイトに切りかかる

フェイトはそれを避ける

そして手にバルディッシュを手に持つ

「管理局に、我らが主に手を出されるのは困るのだ」

「私の通信防御範囲から、出すわけにはいかない・・・

木野さんも・・・！」

そう言ってシャマルは木野を睨む

そしてヴィータはなのはの前に行き、姿を変える

「ヴィータ・・・、ちゃん」

「邪魔・・・、すんなよ、もう後ちょっとで助けられるんだ

はやては、元気になって・・・、私達の所に帰ってくるんだ！

必死に頑張ってきたんだ・・・、後ちょっとだから・・・

邪魔すんなぁああ！！」

そう言ってデバイスを振り上げ攻撃する

そして爆発が起こるが、そこにはセットアップしたなのはの姿があった

その姿にヴィータは呟く

「悪魔め・・・」

「悪魔で・・・、良いよ、・・・、悪魔らしいで話を聞いてもらうから」

そう言って二人とも空と飛ぶ

「シャマル、お前は離れて通信妨害に集中していろ」

「うん」

シグナムはシャマルに命令し、離れさせる

そして二人とも姿を変える

「闇の書は・・・、悪意ある改変を受けて壊れてしまっている

今の状態で完成させたら・・・、はやては！」

「我々はある意味で、闇の書の一部だ！」

そしてヴィータが答える

「だから私達が、一番闇の書の事を知ってんだ！」

「じゃぁ、どうして！？

どうして闇の書なんて呼ぶの！？」

「え？」

「なんで、本当の名前で呼ばないの！？」

「・・・、本当の・・・、名前・・・」

そしてフェイトもセットアップし、姿を変える

そして同時に攻撃を仕掛ける

そして木野は・・・

（完全に空気になっちゃいましたね・・・、どうしましょうか
通信妨害は管理局に知られてしまうから論外として・・・ムッ）
なのはの流れ弾飛んでいきバク転して避ける
「すみませーん、っと」
なのはは、謝りながらヴィータの攻撃を避ける
（ふぅ・・・、そこだ！）
木野は謎の気配を感じ、手に魔力を集め
ナニカに当てる、その当てた場所には・・・
「やはりいましたか・・・、仮面の男・・・」
そこには、前と同じ通りの姿をした仮面の男がいたが
フェイトはその仮面の男に攻撃を仕掛けようとしたがもう一人仮面の男が現れ蹴られる
「なっ、もう一人！？」
すると仮面の男はカードを取り出し
その場にいる全員にバインドを掛ける
「くっ、このてい・・・、なっ！？」

木野には6重バインドを掛ける
そして仮面の男が手を上げると闇の書が現れる
そしてそれを掲げる
するとシグナムとシャマル、ヴィータと木野のリンカーコアが胸から出てくる
「ヌッ、ぐぅ！」
木野はバインドを解こうと必死に腕を動かす
そして闇の書が蒐集を始める
するとシグナム達が苦しみ、消えかかってゆく
（くっ、この状況をなんとかする方法は・・・）
するとザフィーラが現れ、仮面の男に攻撃をする
仮面の男は攻撃を防ぐが、少しバインドが緩む
（しめた！）
その隙に木野はバインドを無理矢理解き
仮面の男Aに飛んでゆき、顔に渾身の右ストレートを与える

「グハッ、だがもう遅い！」

仮面にヒビが入るがすぐまた木野にバインドを掛ける

「くっ！」

そしてなのはとフェイトと共にピラミッド型の牢に閉じ込められる

因みになのはとフェイトは４重バインド

木野はさっきよりも増えて１６重バインドを掛けられる

そして仮面の男達がなのはとフェイトに化けて屋上にはやてが召喚される

「まずい！！」

木野はそう直感で考え、バインドを解こうとするが解けない

そして化けた仮面の男達が何やら話す

そして・・・

「・・・、間に合わなかったか・・・」

そして闇の書が完成され、はやての姿が変わってゆく・・・

第八話（後書き）

はい、闇の書が完成されました

あれ・・・?、おかしいなぁ・・・

予定では変身させるつもりだったのに

何でこうなったんだろう・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9655p/

魔法少女リリカルなのは　ANOTHER　AGITO　STORY A's

2011年4月8日00時56分発行